



会報

第30号

平成9年3月

アルテピア

北海道美術館協力会

札幌市中央区北1条西17丁目 電話011-644-4025



新収蔵作品

デイヴィッド・ナッシュ「十字形に焦がした卵」

1994年 ナラ 径93.0×高さ178.0cm (北海道立旭川美術館蔵)

卵形は、私たちにとって最も親しみ深い形のひとつといえよう。バランスのとれたなだらかな丸みは、快く、安らげる印象を与えるばかりでなく、生命の誕生を告げる象徴性をも内に秘めている。

さて、ここにあるのは、木でできた巨大な卵である。表面にはいくつかの十字形が刻み込まれており、その部分は炭のように黒々とした表情をみせている。

この作品は、イギリス、北ウェールズ在住の作家デイヴィッド・ナッシュが、道北の音威子府村を舞台に繰り広げたプロジェクトにおいて制作したものである。ナッシュは、春・夏・冬という3つの季節を通じて音威子府の森に分け入り、その豊かな自然

と対話するなかで作品を生み出していった。この卵も、樹齢100年というミズナラの巨木から彫り出されたもので、むきだしの木肌や無数に走る亀裂が自然の荒々しい相貌をとどめている。一方、黒い十字形は、燃やすことで生じた木の表情の変化を強く印象づける。それらの要素はやや傾き加減のどっしりとした卵形によってみごとに統合され、生命感あふれる力強い造形へとみちびかれている。

音威子府の森の生命を宿したこの愛すべき卵は、現在、旭川美術館のロビーで多くの来館者の目を引いている。

目標を見据えて

協力会理事 和田 壬 三

当協会発足にあたり、木路毛五郎副会長が広げた大風呂敷は、協会の会員を10万人集めれば、年会費を1人1万円として10億円になる。そのうち半分を会員に還元しても、毎年5億円の美術作品が購入できる。というものでした。当時の北海道の人口が約500万人でしたから、10万人というと50人に一人という割合ですから、今考えると夢みたいな数ですが、私は信じて入会しました。

あれから20年経ちましたが、目標にははるか遠い次元にとどまっています。しかし、私は目標をお聞きした時に、何時までという期限を聞きそびれました。今は夢のような数字ですが、一步でも二歩でも目標に近づくことが大切であると思っています。目標に期限がないのですから私共の世代にこれを実現する必要もない。気楽に、しかし、しっかりと目標を見据えて前進すればいいと確信し、迷ったり、諦めたりしてはならないと心に言い聞かせています。

先日、東京新宿の伊勢丹美術館で、コーンコレクション展に接することができました。絵が好きな平凡な医師

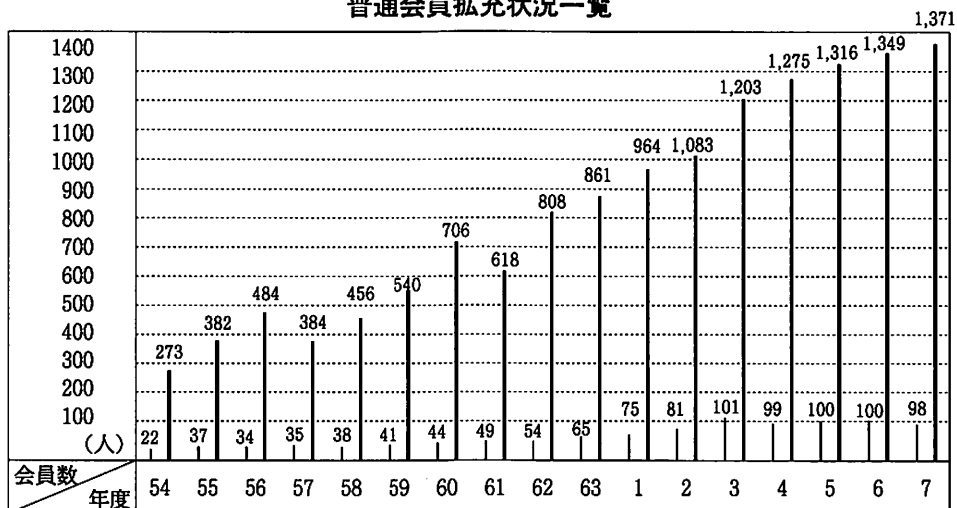
と資産家の姉妹が、毎年の収入の中からコツコツと買い求めた結果であるとのこと。マチスとの親交もあり、大半がマチスの絵ですが、膨大な量と各作品の高い質に圧倒されました。その他にも一作ずつですが、ゴッホ・ゴッガン・ローランサン・ボナール・セザンヌ・ピカソ・ブラック等の作品もあり、全て傑作ばかりです。

個人でも、年月というハンディさえあれば、あれだけの成果を成し遂げることができるのですから、すでに1400名を超える会員を擁する当協会にできないことはないと思いを新にすることができました。20周年にあたり、諦めずに会員拡大に向けて少しずつでも努力することを全会員に呼びかけます。頑張ろうではありませんか。

それにしても世界は広い。このような民間の篤志家がまだまだ数多くいることでしょう。私共の組織を生かして、このような篤志家を発見して、私共への公開を求めすることも可能ではないかと思いつき色気も出てしまいました。

20周年という年月に甘えて思いつくままに勝手なことを申し述べましたことをお許し下さい。

普通会员拡充状況一覧



太線=個人会員 細線=法人会員

開館20周年に思う

北海道立近代美術館 副館長 奥岡茂雄

道立近代美術館が7月に開館20周年を迎える。記念すべき節目を前に、その『これまで』と『これから』にやささか思いを巡らしてみた。

いうまでもなく美術館は地域のために存在する。美術館は変容して止まない地域の状況に常に関心を払い、そのニーズと活力を糧にして、主体性を発揮しつつ地域の後先になって共に歩み、それを通して地域の文化力の蓄積に、また新たな創造に貢献する、ということである。自明のことといえば自明このうえないが、しかしこの機会にやはりしっかりと押さえておきたい。

まず『これまで』。振り返って当館は、この基本路線をひたすら走ってきた、といえるだろう。そしてその一つの例証として、展覧会の観客数は結構説得力を持つものと思う。

むろん単に、人が来さえすればいいとか、人が来なくても構わない、などと短絡的に考えたことは一度もない。その都度一人でも多くの観客を願い、かつそのために精一杯努力を重ねながら、地域にふさわしい展覧会はきちんと確保してきたつもりである。開かれた生涯学習の場として、確かにこれも自明のことに違いない。

そのうえで、開館以来の総観客数550万人余（2月末現在）、年平均およそ28万人という数字は、全国の県立レベルの美術館中トップクラスに位置するもので内心誇らしい気がする。とりわけ10周年以降の伸びが順調なこと、しかもその主たる要因が常設展示室の《これくしょん・ぎゃらりい》や、シリーズ展の《アミューズランド》にあることは注目されていだろう。企画面での地道な

創意工夫が報われた思いがしてなんとも嬉しい。

そして『これから』。総理府の調査によると、1979年を境にして物より心の豊かさを求める声が増え、その差はますます広がる一方という。美術館に対するニーズも一段と多様化してくることは疑いない。じっくり鑑賞するという従来のタイプはもちろん今も圧倒的に多い。が、それよりもむしろ美術品のある風景、ないしは美術館のある風景、つまり空間をまるごと楽しむといったニュータイプが、ここ数年目立って増えていることも事実なのだ。ゆとりとくつろぎを優先させた自然体の美術館利用とでもいえようか。

引き続き館活動のさらなる充実をはかっていきたい。そして並行して人々のこうしたニーズにも応え得る美術館の環境づくりも進めていきたい。その意味からもぜひ、当館と隣の知事公館の敷地を一体化させ、それによって、より美しく広がった空間に、世界的に評価の高い当館のガラス・コレクションの常設館を実現させたいものと思う。

最後に。地域の人々に支えられてこそこの20周年である。とりわけこの間、共に手をたずさえ歩んできた北海道美術館協力会には、ボランティアの方々をはじめ多大にお力添えをいただいた。『これまで』のご協力に深く感謝申し上げ、『これから』もパートナーシップをいっそう密にし、地域のために貢献していきたい、と改めて思いを新たにす一人である。

北海道立近代美術館

—平成9年度上半期の特別展—

北海道立近代美術館は今年開館20周年を迎えますが、その記念展を中心に、平成9年度9月までの特別展を紹介いたします。

年度最初の展覧会は、北海道ゆかりの作家を紹介する道産子シリーズ、『松樹路人展』（4月18日～5月18日）から始まります。松樹路人は北海道羽幌町に生まれ、北見、女満別など道東の町で育ちました。東京美術学校（現・東京芸術大学）で学んだ後、独立美術協会を中心に旺盛な活躍を見せてきた画家です。日常の静物や家族を題材に、緻密な描写とユニークな構図を駆使した詩情豊かな作風で知られますが、近年は北海道の自然に取り組んだ新たな画業を開拓しています。本展は初期から近作までの約70点の代表作によってこの画家の全貌を紹介します。

続く以下の展覧会は、当館20周年を記念して開催されるものですが、その最初が『アイルランド絵画の100年』展（5月24日～6月29日）です。これはダブリン市にある市立ヒュー・レーン近代美術館の所蔵品によって構成されるもので、19世紀から現代にいたるアイルランド絵画を日本で始めて紹介します。アイルランドの近代以降の絵画は、国際的なモダニズムの強い影響と、イギリスからの独立戦争やケルト復興などの民族主義によって独自の性格が与えられたといわれていますが、その絵画世界は、北国の北海道の人たちにも共感を呼ぶことでしょう。

開館記念式典とともに幕開けるのが『マヌーギアン・コレクション、わが心のアメリカ絵画』展（7月5日～8月15日）です。これはこれまであまり知られることのなかった19世紀アメリカ絵画に焦点を当てる展覧会で、この時期のコレクションとして、アメリカ国内で高い評価を得ているマヌーギアン・コレクションの優品によって構成されます。19世紀はアメリカの文化の基盤ができた時期といわれていますが、美術においても独自の絵画が生まれました。本展ではアメリカの自然を崇高に描き出したハドソン・リヴァー派から、アメリカにおける印象主義までの流れを、親しみある作品約60点によってたどります。

ひき続き開かれるのが東京国立博物館の名品でつづる『日本の美・雅の世界』展（8月23日～9月21日）。これは毎年文化庁によって開催されている「国立博物館・美術館巡回展」のひとつとして当館で開かれるものですが、今回は「祈りの形」、「詩歌の雅」、「唐物と唐様」、「華麗な衣装」などのコーナーを通して日本の雅を探ります。国宝、重要文化財を含む140件の名品が出品される予定です。

このほか10月からは、世界の今日のガラス造形の新動向を紹介する「ガラスの新世紀—世界20作家の挑戦」展などを開館記念展として予定しています。



ジョージ・カレブ・ビンガム
「平底船の陽気な男たち」
1846年 油彩・キャンバス
『わが心のアメリカ絵画展』より



松樹 路人
「美術学校—モデルの1日」
1986（昭和61）年
油彩・キャンバス
『松樹 路人展』より

北海道立旭川美術館

平成9年度の展覧会について

当館は来年度開館15周年を迎え、斬新な内容を取り込みながら展覧会事業を展開してまいります。来年度前半の特別展をご紹介します。

1、佐藤 進展 4月12日(土)～6月1日(日)

土別生れで旭川に戦後長く在住して活躍した水彩画家、佐藤進(1914～1992)の回顧展。旭川の第七師団が利用した偕行社(重要文化財、現在旭川市彫刻美術館となっている)を描き続けた「館」のシリーズや、春光台の丘を描いたシリーズなど、多くの市民に大変親しまれた風景画の秀作を中心にその画業を総合的に紹介します。

2、ロバート・メープルソープ展

6月7日(土)～7月6日(日)

ニューヨークの美術界にセンセーショナルに登場した写真家メープルソープ(1946～1989)は、42歳でエイズのため亡くなるまで、天才的な感性を優れた造形性によって、世界中に感動を与えました。この展覧会では、184点の作品をポートレート、ヌード、静物、セックスの4コーナーに別けて、その生涯と芸術を紹介します。

3、オランダ・フランドル風俗画展

7月12日(土)～8月17日(日)

ハンガリー国立ブタペスト美術館、ケルン市立美術館所蔵の作品により、17世紀、18世紀のオランダ、フランドル地方で盛んに描かれた多彩な風俗画の世界を中心に紹介します。主な出品予定作家はレンブラント、ヴァン・ダイク、ダヴィッド・テニールス(子)、オスターデなどです。

4、フランク・ロイド・ライトと日本展

8月23日(土)～9月21日(日)

アメリカの建築家で帝国ホテルの建築でも知られる建築家フランク・ロイド・ライト(1867～1959)は、東洋美術のコレクターとしても知られ、屏風絵、浮世絵などの優れたコレクションの全貌が近年の調査で明らかになりました。狩野派の屏風の中には、永徳筆と考えられる作品があり、また葛飾北斎、歌川広重の浮世絵、土佐派の扇面画など日本美術の名品が多く含まれています。

北海道立函館美術館

平成9年度前半期の展覧会予定

「写真渡来のころ」展

[4月5日(土)～5月11日(日)]

写真機の原形と考えられるカメラ・オブスキュラ(暗箱)が伝来した17世紀中頃から「写真術」そのものが渡来する幕末、そして急速に広まっていく明治10年前後まで、写真術が渡来した状況を西洋画法や光学機器などをまじえながら検証します。

また、函館における写真術の先覚者、横山松三郎、木津幸吉、田本研三の業績も紹介します。

「ブザンソン美術館展」

[5月17日(土)～6月22日(日)]

フランスのブザンソン美術館は、その長い歴史の中で蓄積されたデッサンを中心とする充実したコレクションで知られています。また、函館とは蠣崎波響の所蔵作品を通して以前から交流があります。本展では、ブーシェやフラゴナールなど18世紀のロマン主義から、マチスやデュフィなど20世紀初頭のフォーヴィスムに至るフランス美術の流れを、油彩・デッサン・版画・彫刻等で紹介します。

なお本年はフランスにおける「日本年」にあたり、道内博物館の所蔵品による「アイヌ展」がブザンソン美術館で同時期に開催されます。

「少女まんがの世界展」

[6月28日(土)～8月20日(水)]

近年、各地の美術館でまんが展が開催されていますが、本展は少女まんがに初めて焦点を当てたもので、池田理代子や大島弓子、美内すずえ、山岸涼子など道内出身者を含めた約10人の作家が予定されています。

代表作の原画や単行本、イラストレーション原画などを通じて、女性独自の視点や感性、描写に基づいた表現、背景となる時代状況などを紹介します。



フランソワ・ブーシェ
「中国の庭園」1742年頃

美術館ニュース……………

北海道立帯広美術館

平成9年度上半期の展覧会事業についてご紹介します。

4月5日(土)から5月5日(月)までの帯広美術館所蔵作品による企画展示をはさみ、5月13日から6月15日(日)まで、「ヨーロッパ・アカデミー展」を開催します。アカデミーとは、17世紀から19世紀にかけてヨーロッパ各国に設立された官立の美術組織です。とりわけフランスの美術アカデミーは、体系的な美術教育の実施、主題や表現面での規範の設定によって、当時の美術界を支配しました。アカデミーにおける表現傾向はアカデミズムと呼ばれ、画壇の主流を占める一方で批判の対象とされてきましたが、近年その影響の幅広さと重要性が見直されてきています。今回の展覧会では、ポーランド国立美術館の所蔵品より、新古典主義を代表する画家アングルをはじめ、ブーグロー、マティコなどヨーロッパ各国のアカデミーの巨匠たちの作品約70点を紹介し、ヨーロッパ絵画のいわば正統派ともいえるアカデミズムの系譜を展望します。

ついで、6月21日(土)から7月31日(木)までは、「マリリン・モンローとエルビス・プレスリー展」を開催します。今世紀のアメリカを代表するスーパー・スター、モンローとプレスリーは、1950年代・60年代の社会や文化を象徴するシンボルであり、さまざまな美術家が彼らをモチーフとした作品を制作してきました。本展は、現在アメリカ国内を巡回中の展覧会を日本向けに再構成したのですが、ウォーホルやハミルトンなどの現代美術の巨匠から、現在活躍中の若手・中堅作家まで約120点の作品により、現代アメリカ文化におけるこの二人の象徴性を検証します。



「マリリン・モンローとエルビス・プレスリー展」
会場風景

北海道立三岸好太郎美術館

三岸好太郎美術館では3月30日まで、所蔵品展「三岸好太郎の世界—ロマンと抒情の画家」を開催しています。三岸好太郎は1934年、31歳の若さで亡くなっています。わずか10年あまりの短い画業の中で、彼は意欲的に様々な傾向に学び、作風は激しい変貌を繰り返しました。しかし、そうした変化のうちにも一貫して表われている豊かなロマンと繊細な抒情は、三岸天性の感覚であり、彼の作品の最大の魅力といえるでしょう。展示では、三岸の初期から晩年までの歩みを当館所蔵の代表的作品により紹介しています。デビューの頃の素朴な情感あふれる人物像、独自の絵画の開花期を飾る憂いを帯びた数々の道化像、一転して抽象風や画面をひっかくなど前衛手法を試みたり、蝶と貝殻をテーマとした幻想の世界を表わした晩年の作品などによって、彼の多彩な試みとともに、その底に常に漂う詩人のような感性をご鑑賞いただければと思います。

会期中の2月22日には、美術館コンサートを開催し、女性ギタリストの渋谷環氏を中心としたソロとアンサンブルのプログラムをお楽しみいただきました。来る3月29日には、美術館ミニ・リサイタルを行います。若手演奏家による弦楽四重奏をおおくりします。

来年度は、当館開館20周年の年にあたります。記念事業のひとつとして、「道化」をテーマとした特別展を計画中です。6-7月頃を予定し、様々な関連事業等も検討中ですのでどうぞお楽しみに。



「立てる道化」
1932年頃

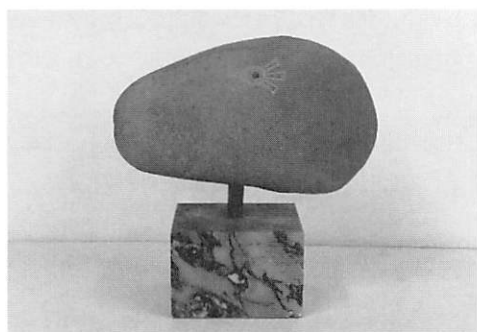
財団法人札幌彫刻美術館

札幌彫刻美術館は、半世紀にわたり制作した本郷新の彫刻627点、絵画668点を収蔵しています。これらの収蔵作品を、夏の特別展をはさみ年2回展示替えをしてお紹介しています。

3月30日(日)までは、「空間に描かれた美“彫刻”—素材と彫刻」展を開催しています。

この展覧会では、1970年代に連作した無辜の民シリーズ14点をはじめ、数少ない石を素材とした頭像や、テラコッタによる『北方シリーズ』4点と『土と火の祭』も展示しています。その他、初公開作品6点を含め『花』をテーマとした絵画も展示し、彫刻家本郷新の別の一面もご覧いただける内容となっています。

4月4日(金)～8月24日(日)までは、「平成9年度前期収蔵品展—馬の造形展」(仮称)として、新たに収蔵した馬の石膏原型・レリーフ・油彩画5点を加えて展示します。馬の作品は、レリーフ等で馬と少年の心の触れ合いを表現して連作しています。また、『馬の首』をブロンズ・木・石それぞれの素材を生かし制作しています。『サーカス』では、躍動的な馬に乗った人物との一瞬の緊張感が、彫刻家の眼で見事に表現されています。



平成9年度当美術館で最も重視している事業としては、「第8回本郷新賞」の選考があります。「本郷新賞」は、日本野外彫刻の第一人者本郷新を記念して創設された事業です。今回は、平成7年1月から平成8年12月までに日本全国の公共空間に野外設置された彫刻作品を対象として、全国の推薦委員に推薦いただいた中から、優秀な作品1点を選考し賞を贈呈します。それにあわせて、受賞者による「受賞記念彫刻展」を8月30日(土)～9月28日(日)まで開催することを計画しています。

芸術の森美術館

1916年の早い時期にストックホルムの写真館で撮影された正装姿の男女の写真。堂々と立つ男性と寄り添う女性。まるで夫婦の記念写真のように。これが二人で撮る最後の写真になろうとは。しかし女性は、そう考えてはいなかったようですが。彼女の名はガブリエーレ・ミュンター、38歳か39歳、画家、ドイツ



ガブリエーレ・ミュンターとカンディンスキー (1916年、ストックホルム)

人。男性はヴァシリー・カンディンスキー、49歳、画家、ロシア人。二人は1902年にミュンヘンで出会い、少なくとも10年間は非常に親密な関係が維持されました。ともに過ごした時間はそれぞれの仕事に大きな実りを与え、特にカンディンスキーのものは20世紀初頭の芸術における最も重要な作品に数え上げられています。「カンディンスキー&ミュンター 1901-1917」展(4月5日～5月25日)は、この二人が出会い別れるまでの時期を扱ったもので、特にカンディンスキーが生み出した非対象絵画の成立に焦点が当てられています。

1908年晩夏、カンディンスキーはミュンターと友人の画家ヤウレンスキー夫妻とともにミュンヘン近郊の村ムルナウに滞在、その光輝く色鮮やかな景色の中で対象の持つ固有の色から画面の色彩を解放することを発見しました。またミュンターから受けたバイエルン地方の宗教的な民衆芸術であるガラス絵の影響を消化し、「印象」「インプロヴィゼーション」「コンポジション」などのシリーズの内に非対象絵画を実現していきます。しかし間もなく第一次大戦が勃発。敵国人であるカンディンスキーはミュンターをともなって1914年8月スイスに逃れますが、崩壊に向かっていたお互いの関係はその年の11月末、チューリヒでの別離によって実質的な終末をむかえることとなります。この展覧会は二人の関係と作品の変遷を124点の作品によって概観する日本では初めてのものです。

第5回道内美術館巡りの旅に参加して

今井 葉子



美瑛「拓真館」
横の白樺の小径にて

9月26日午前9時、小雨模様の中、バスは22名の参加者を乗せ道新ビル前を出発、まず江別市陶芸の里の『セラミックアートセンター』へと向かいました。

江別といえば、道庁赤レンガ庁舎に象徴される赤レンガ・

レンガ餅・そして戦時中の木製飛行機ぐらゐのイメージしかありませんでしたが、展示室で、左右対称の登り窯・輪廻窯・トンネルキルンと、効率化、近代化への時代の変遷や、宇宙探査ロケットのスペースシャトルの外壁材に使われ、耐熱・堅牢・軽量の長所を持つ近未来のレンガ・セラミックの展望等、大変参考になりました。

また別室では、本道の焼き物の振興に大きな寄与をした『北斗窯』の小森忍を初めとする、道内の代表的な陶芸家の作品を鑑賞することができました。

高速道の砂川SAで昼食休憩を取った後、一路北上し旭川に向かいました。車中で近代美術館学芸員の佐藤由美加さんから、『浮世絵』の語源・歴史・一般常識等を分かりやすく解説していただきました。

市内に入り、まず嵐山地区の『陶芸の里』で50分間の自由散策があり、晴れ上がった秋空の下、『大雪窯・千尋窯』等をゆっくりと見て回りました。

次は常盤公園内の『旭川美術館』で「プラハ国立美術館所蔵浮世絵展」の鑑賞です。180点余りの作品が、時代別・著名な絵師別に展示されていて、絵葉書やポスター等の複製とは違う、さすが本物の魅力に食い入るように見て回り、1時間があっという間に過ぎてしまいました。絵師の素晴らしさだけでなく、彼等を陰で支えた彫り師・摺り師・版元らの存在も忘れてはならないと思いました。

ただ各作品の大きさがB4サイズ大ですので、照明をもう少し明るくしてほしいと思いました。

次の西神楽の林業試験場内の『木と暮らしの情報館』では、暮らしの中に道産の広葉樹林の持つ「温かみ・豊かさ」の良さを見直してもらおうというテーマが良く伝わってきました。

今夜の宿は、靡ろ昆布の幕を張ったような白樺林を通り抜けた先の美瑛町白金温泉の白亜の瀟洒なホテル、大浴場の透明な浴槽に足腰を伸ばし、疲れを癒しました。

二日目は、美瑛高原の幻想的な風景写真で有名な前田真三さんの『拓真館』を見学。それから、上富良野・富良野・芦別・赤平を経由し、滝川で昼食。高速道路で江別から長沼町の『雪炎窯』へと向かいました。折よく窯主の板東陶光さんがご在宅で、道展へ作品搬入日というお忙しい中、登り窯の所までの案内や、自宅各室の展示作品の懇切丁寧な解説をしていただき、大変印象的でした。

二日間の短い旅でしたが、数多くの思い出と来年の企画を楽しみにして、4時半無事到着・解散しました。



旭川・陶芸の里
「大雪窯」の前にて

美術研修旅行記

東欧4ヶ国（ベルリン・プラハ・ウィーン・ブタペスト）12日間美の探訪に参加して

佐々木 祥子



クリムトの絵の前で

最初の訪問地は、1961年から28年間東西に分断されたベルリン。1991年10月全世界から注目され東西統一が達成され問題の壁が破壊された。生死をかけた市民達が東から西へ壁を越えようと悲惨きわまりない情景の壁博物館の記録で胸がつぶれる想い。その壁が今は面白い現代アートでうめつくされているし、破片が売られている。私も記念にと一筆入れてしまった。街はブランデンブルグ門など立派な雄大な建築物が整然として、又、人々の様子も明るく西側から沢山の人々が流入し、物資も結構豊富で暗いイメージは感じられなかった。そして、ベルリン美術館は、レンブラント・ルーベンス・クラナッハ・デューラーなどが主で、ブリューゲル（父）の「ネーデルランドの諺」の絵が印象的だった。七つの大罪や人間の愚かさ、神の冒瀆に関連した「さかしまの世界」を象徴する118の諺になっているとの事。100号大にこれだけの内容を入れ構図と色彩がきまっているのはさすがと完服。

次にドレスデン美術館では、ボッティチェリ・ラファエロ・フェルメールなどの古典絵画を鑑賞しプラハへ…

ここでは特に楽しみにしていた「カレル橋」が日がくれて暗くてその上に時間もないといわれ走るように雨の中を半分迄しか渡れずまい!!プラハ美術館は、ルソー・ピカソ・ココシュカ・スーチンなど19-20世紀中心で、私の好きなコルビジエの小品もあり現代展もありで時間が足らず、早くホテル入りするより閉館までいたいと思っ

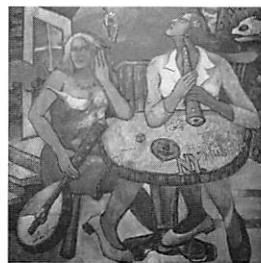
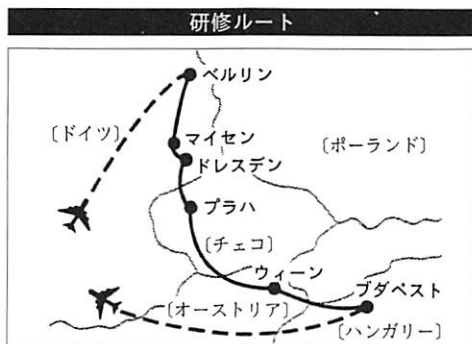
た。結局夕食前は雨の中を散歩して過した。

次は「美しき青きドナウ」の夢の都ウィーン。ここはクリムト・エゴンシーレ・オペラを楽しみにしていたのに、オペラ座でないばかりかオペレッタで最後部の隅が私の席で見えなくて全く失望!!皆さん憤まん遣る方なし!!絵画はブリューゲルの「バベルの塔」は以前にも見えていて絶賛ではあるが私は「冬景色」が好きです。オーストリア美術館のウィーン世紀末のクリムトとシーレの「母と子」「死と乙女」「家族」等々魅了され虜になってしまった。それにしても街全体大自然に恵まれクリムト

の風景画の中にいるように錯覚する程で、男性はシーレの主人公の如き顔立ち、しぐさ。やはり彼等の絵は、この地にして生きざまを含め自然にうまれたような気になる。ホテルが又あらゆる所クリムト一色で三回の朝食の度に違う絵の前で幸せでした。運の良い方のお部屋には100号大の絵が……。

最後はドナウの兩岸に中世の面影あふれた華麗な街並のブタペストで又いつの日かという想いを残し帰途へ。

大事に持ち帰ったクリムトの風景画をアトリエに飾り、スメタナのCDを聞きながら、次のキャンパスにどうぶっつけていくか、少しずつ去来してくるのです。



佐々木祥子
(162×162cm)
New York Andante!!

雪やこんこん



藤井 美子

札幌に住んで一年と八ヶ月。この街にぞっこん惚れ込んでいます。まず、生活するのにとても便利。そして、空気はおいしいし、魚や野菜もおいしい。極めつけは、雪です。ここまで話す友人達は「あまーい！あと何年かすれば雪なんてうんざりって言うに決まってる」と声をそろえます。でも、私、札幌に来て最初の冬があのだ力雪だったので。まるで空に穴でもあいてるんじゃないかと思うぐらいに降ってくる様子は、驚きを通り越して感動的でした。雪かきも毎日やりました。運動不足の冬にはもってこいの作業です。(筋肉痛になりましたけど)それに、雪をかたまりできれいにするくえた時の快感は何とも言えません。(変ですか?)

まっ白な世界にナナカマドの実の朱色。ゴミを漁るカラスでさえ黒が際立って日本画の世界です。

毎朝、カーテンを開ける瞬間が楽しみです。

さて、今年の冬はどうでしょう。

三指つく?



山下 敏明

私に言わせるとポツシユもビュッフェもピカソも駄目。風俗画のハルスもゴヤさえも怪しい。まあヤンセンは許せるか。我国では、光琳駄目で宗達はさく、いいのは鳥羽僧正と北斎に辛うじて広重。当今なら横山大観、小林古径、山口華楊、小茂田青樹位が合格か。何故私はかく断定するか。理由は簡にして明。駄目画家達の描く梟、木菟の画がなっちゃうらんから。よろしいか。他の鳥は知らず、そもそも、梟、木菟類は樹に止まるに、前後向き合った二本ずつの指をもつてる。しかるに駄目画家達の梟、木菟は、ナント、指三本を前に出して止まるから笑止千万だ。オンリーそこにこだわるのは、私に本だ置物だと、既に二千点を持つ梟の蒐集家だからなの。なら、本道の米坂ヒデノリ、谷口一芳、岩船修三、武田伸一、手島圭三郎と言った面々はどうかって?案ずるなかれ。郷土愛で言うのではないが、皆二本指で観察眼の程は確か。あー、よーかった。ホーツ、ホーツ!!

東欧の味



佐藤 文子

芸術の古都ブラハとブタベストは共産圏の国々の影響や色調がブレンドされた圧倒的な魅力となって私を魅了しました。この東欧といわれる国々を、晩秋という言葉で表現して適切ではないかと感じました。

磨き上げられた芸術品や絵画の鑑賞は、その背景にある哲学的な論考迄要求するので大変なエネルギーを要します。絵画に対する私の感慨を述べると、「宗教画は疲れる。サロメや自殺しようとしている女性の絵、暗澹とした不可解な絵は、ボロボロになった私の神経をいためつける。クリムトの絵は嫌いだ、その病的な女性の表情がいやだ。視線が行くたびに、ほっとするような、そこにあるだけで人の心をなごませる飽きない絵が良い。それが芸術・絵画の技ではないか」と。

芸術の古都ブタベストは、音楽・絵画・英文学と犬の大好きな私を強烈に引きつける都であり、ウィーンの町角で賞味した「にぎり酒」は最高の芸術品の様に美味だったのでした。

二十七年ぶり



井口 光生

七月の末、二十七年ぶりにエルミタージュ美術館を尋ねた。毎年のようにヘルシンキには行くものの、つい目と鼻の先にあるサンクト・ペテルブルグはなぜか遠かった。長いソ連時代のせいでもあった。

共産党支配が終わったとはいえ、人の考え、行動は簡単に変わるものではない。久しぶりの訪れだけに、懐かしさと大きな期待でいっぱいだったが、戸惑いも多かった。

窓口で「お金を払えば写真OK」と言うので支払ったものの、入り口のおばさんが大声で私をどなりつける。よく聞いてやっとなんか分かったことは、払い過ぎ。おばさんの親切心のために私の心臓は震え上がり、入館が三十分以上も遅れてしまった。

でも、エルミタージュはやはり素晴らしい場所だった。ヨーロッパ絵画をゆっくり見ようと思っていたが、冬宮の豪華壮麗な装飾、彫刻、塑像に足が進まず、予定は大幅に狂った。

その夜歩いた白夜のネヴァ川畔にはロシアの若い人々があふれ、新しい時代が流れていた。

新入会員の紹介

ご入会ありがとうございました(平成8年7月~平成8年12月)

7月	穂坂 豊美 札幌市	田中 和子 "	林 忠博 "	戸田 すみ "
	佐々木 亮一 "	石川 貴美子 "	小林 道子 "	石川 節子 "
	高田 修一 "	藤村 穎子 "	道下 和子 "	東出 和歌子 "
	元山 安治 "	益井 弘 "	吉田 みさ子 "	伊藤 千栄子 "
	角田 英男 "	藤原 頼亨 "	鈴木 寛子 "	東田 秀美 "
	山下 敏明 室蘭市	村上 純子 "	佐藤 有希恵 "	菅原 ひろゑ 千歳市
	早苗 信隆 札幌市	柳田 雅子 "	廣崎 叡子 江別市	11月
	長谷川 和子 "	8月	佐藤 京子 札幌市	松本 宰子 札幌市
	深作 真智子 "	中村 菜穂子 札幌市	9月	井門 幸子 "
	藤井 美子 "	林 正宏 "	眞木 加奈子 札幌市	加藤 啓子 "
	三浦 真 "	北出 朝路 "	阿部 田鶴子 "	古川 珠枝 "
	逸見 志保子 "	菊地 一雄 "	大庭 雄一 "	鈴木 貞子 "
	千葉 幸子 "	澤谷 マサ子 "	三宅 由美 "	12月
	山城 薫美子 "	柿崎 三津子 "	三田村 紀子 "	北川 雅子 札幌市
	黒沢 ヨシ子 "	青木 理 "	村端 紀代子 旭川市	船川 照枝 "
	加藤 美保子 "	佐藤 文子 "	日比野 美和 帯広市	佐藤 貴 "
	斎藤 のぞみ "	佐藤 貢 "	10月	松本 静江 "
	鈴木 由美子 "	大石橋 弘 "	岡田 喜美恵 札幌市	徳永 正子 "
		佐藤 ハル子 "	斎藤 ますみ "	

PR用

リーフレット完成!

前号でもお知らせしたが、「アルテピア」をPRし、新会員を募集するために作成中だったリーフレットがこの度完成した。これまでのものに比べて少し小さめになり、持ち運びしやすくなっている。

会員の拡充を図ることは、間もなく20周年を迎える当会にとって、何より大切と思われるが、この新しいリーフレットが少しでも役立つことを願っている。

知り合いの方に見せたい、こんなところに持っていったらどうか、等ご意見、ご要望があれば事務局まで是非お知らせいただきたい。



広報活動の

今

過日、近代美術館の広報担当の方々と当会広報部が今後の広報活動について意見交換をしました。

例えば、各美術館のポスター等を合同掲示できる場所があれば多様な情報を一度に提供できるのでないか、また各JR駅に掲示を依頼する、或いはチラシとポスターの効果的配布の方法等々有意義な話し合いでしたが、同時に広報活動見直しの時期にきていると思いました。

美術館を知っていただくには、どのような方法が考えられるのか、そして来館していただくためには……今後も続く課題であり、試行錯誤で検討の昨今です。

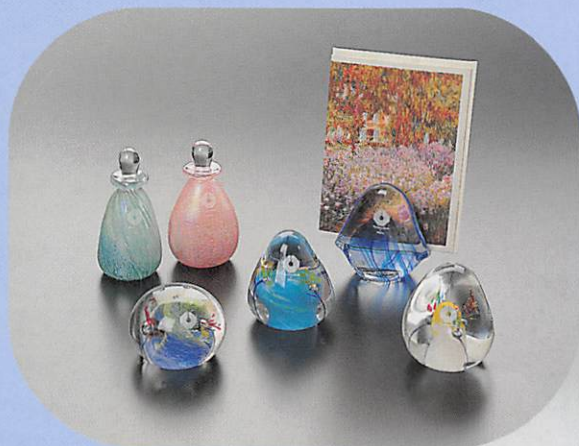
編集後記

本年8月に創立満20周年を迎える協力会、この会報も30号になりました。原稿をお寄せ頂いた多くの方々、そして読者の会員の皆様に深く感謝しています。

この記念すべき節目の年にあたり、会員の輪をより大きく拡げるために役立つ会報、より良くご理解いただく会報にしていきたいものと考えておりますが、特に、会員皆様からの積極的な「投稿」に期待をしております。

身近な情報源として利用していただき、皆様のご意見、ご感想をお知らせ下されば幸いです。お手紙をお待ちしております。

ガラスの小物たち



ペーパーウエイト
カード立て
アートマイザー



The Glass Studio
in
Otaru



〔ピエロ〕 デカンタ
ボール
ようじ入れ



〔ふくろう〕
ペーパーウエイト
コップ
ジョッキ
ペンダント

GLASS
MURANO

協力会売店